

「(ライデン大学アジア学サマースクール派遣プログラム) 参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程1年 大西 貞剛

今回のプログラムによってライデン大学で開催された The 9th Leiden Summer School in Languages and Linguistics に参加させて頂きました。そこではホメーロスにおけるギリシア語、ヒッタイト語、およびトカラ語文献購読についての授業に出席しました。

ホメーロスにおけるギリシア語の授業では、Lucien van Beek 講師より韻律の基本的な規則および一歩進んだ韻律の制約および法則について学び、さらにそれらがホメーロスにおいてどのように反映されているか、またそれらに適合するためにどのように語形式が創造または使用されているかについて学びました。印欧語比較研究では、ある語形式を扱う際にそれが果たしてその言語の古い状態を保存しているものであるのかそれとも二次的な形成であるのかという見極めが重要になりますが、今回の授業でギリシア語についてその見極めの助けとなる知識を習得することができたと考えています。また、Alwin Kloekhorst 講師から受講したヒッタイト語の授業については、基本的な箇所からヒッタイト語の文法を学ぶことができ、私の指導教官である吉田和彦教授から受講したヒッタイト語の授業で得た知識をブラッシュアップする良い機会となりました。また、ヒッタイト語に見られる語根の母音階梯が *o と *e で交替する動詞形式について、それらは一般に古い形式を保持していると考えられていますが、それらは新しい形式だとする Kloekhorst 講師の考え方など、授業の内外でのディスカッションの場を通じて独自の考え方を知る事ができました。また、Michaël Peyrot 講師によるトカラ語の文献読解の授業では、トカラ語 A, B の両方の言語について、トカラ文字で書かれた数個のテキストを集中的に読む事ができ、読解力をつけることができました。また、トカラ語のテキストは仏教に関連して書かれたものがほとんどであるため、仏教について背景知識をつけることの必要性を感じました。

今回のサマースクールを通じて感じた事は、ディスカッションや雑談の場で相手を説得や納得させることができるような英語でのコミュニケーション力が私にはまだまだ足りないということと、ラテン語・ギリシア語についてヨーロッパの学生は若い段階から学習を始めることもあり、私のラテン語やギリシア語の読解力や語彙力に比べると高い水準にあるため、今後これらを強化する必要があると感じたことです。今後は自分の研究と並行してこれらの能力を高めていきたいと考えています。

また、今回のサマースクール全体を通じて、若手研究者とのネットワークを作り、それぞれの国の研究事情や研究環境、最新の潮流について知識を得る事ができたことは大きな収穫でした。今後は印欧語の比較研究が盛んなアメリカへの留学を視野に入れていますが、イタリック諸語の文献学が盛んなイタリアやドイツへの短期留学も視野に入れたいと考えるようになりました。また、ベルリン自由大学のとある先生からはドイツの DAAD という制度を通じてビジターとして研究に来てはどうかという提案を頂きました。ドイツ語の読み書き話しができるということは印欧語比較研究者としての必要条件でもあるため、前向きに検討したいと思います。

最後に、今回のサマースクール派遣を全面的にバックアップして下さった KUASU の方々に厚く御礼申し上げます。スムーズに手続きをして頂いただけでなく、保険のサポートなども迅速に対応して頂きました。今後ますますプログラムが拡充し、よりたくさんの学生が海外へ出るチャンスが更に広がればと期待しています。ありがとうございました。